

## 第4章 京都大学病院構内A J 16区の発掘調査

網 伸也\* 東 洋一\*

### 1 調査の経過

今回の調査は、京都大学医学部附属病院先端医療機器開発・臨床研究センター建設にともなう発掘調査である（図版1-366）。調査対象地は、平安時代後期に造営された白河北殿の北西に位置し、白河街区の西方縁辺部にあたる。また、周知の遺跡としては平安時代から近世にかけての複合遺跡である聖護院川原町遺跡の範囲に含まれており、江戸時代では大田垣蓮月尼の邸宅跡が周辺に想定されている。過去の近隣での調査をみると、当調査区の東で実施したA J 18区調査では、多数の中世井戸や近世土取穴とともに、平安時代の井戸や土坑も検出しており、それ以前に溯る流路堆積も確認している〔五十川ほか1989〕。今回の調査では、A J 18区の遺構群の広がりを確認するとともに、白河街区縁辺部における土地利用の実態を考えるうえでの考古学的データの収集を目的とした（図80）。

発掘調査は、2010年4月1日から2010年7月21日まで実施した。調査面積は1085㎡である。調査に際しては、掘削廃土の仮置き場を調査地内に確保するために、調査区を東半の1区と西半の2区にわけて反転しておこなった。先行して調査した1区では、第1面として西へ段差をもつ近世の耕作面、第2・3面として調査区南半で中世および近世の土器を多数包含する土坑を検出した。とくに、中世で円形土坑群を、同じ場所を掘り直した状況で確認しており、井戸であるならば宅地として利用されていた可能性もある。ただ、北半では後背湿地のような落ち込み遺構を検出し、弥生時代から中世にわたる広い範囲の遺物が少量出土するにとどまっており、居住地としての痕跡は認められなかった。

反転掘削後に実施した2区の調査では、1区から続く近世の耕作面とともに、西へ約1m落ちる南北方向の段差を検出した。この段差を降りた面は、近世初頭以降は耕地化されているが、それ以前では川となっていたことが明らかとなった。これらの調査成果から、京大病院建設以前の耕地としての土地利用の実態を明らかにするとともに、中世では調査区南東部は宅地の一部として使われていた可能性もあるが、西側3分の1は南北流路が流れており、調査地全体として宅地利用にあまり適さない場所であったことが判明したといえる。

---

\*京都市埋蔵文化財研究所

京都大学病院構内A J 16区の発掘調査

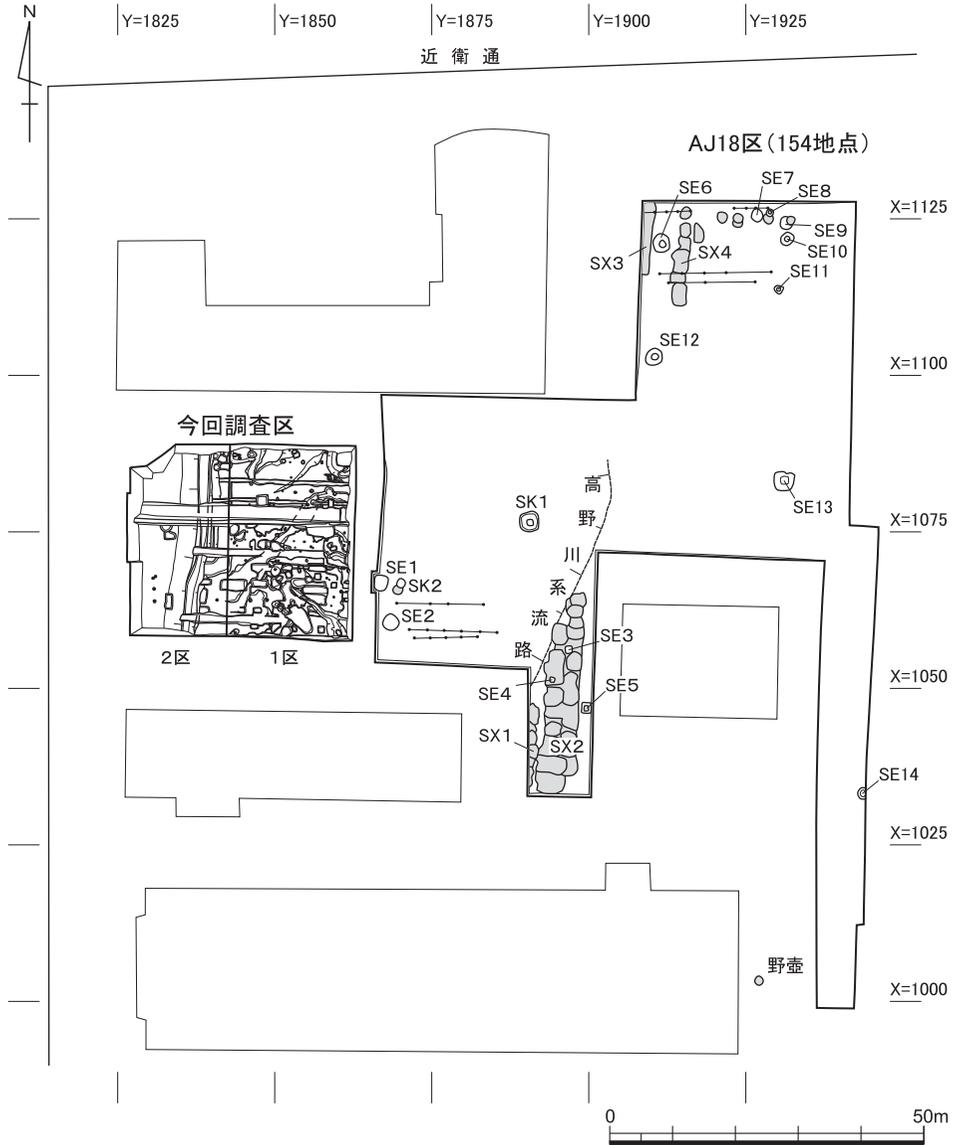


図80 調査地点の位置 縮尺1/1200

これら第1区と第2区の各遺構面については、記録写真を撮影し、全体の平面図とともに必要に応じて個別に平面図と断面図を作成した。また、調査区全体の層序を確認するため、第1区から第2区に連続する東西方向の断面記録用畔を残し、断面観察および実測図作成をおこない、南北断面図として第1区東壁の断面実測図を作成している。

## 層 位

なお、今回の調査では、重機によって近世耕作面から上の整地層を排除したが、地表下1 mまでの現代盛土については場外搬出をおこなっている。

### 2 層 位

調査地は現状では京大病院の整地によって平坦面となっているが、病院建設以前の旧地形は基本的に東から西へ段々に下がる耕作面である。調査地の基本層序を東からみると、1区東壁では地表下約0.7～0.8mまで、2区西壁では地表下約1.2mまでが現代盛土で、その下層が京大病院建設時の整地面となる（図81）。

この整地土はにぶい黄褐色砂泥1・暗灰黄色砂泥1・黒褐色砂泥1（第1層）で、整地面上は1区東端部で標高48.8m、2区東端部で48.7mとほぼ平坦面となっているが、2区西半では段差となり、標高48.3mの平坦面となる。堆積の厚さは段差をもつ下層の耕作面を埋めているため、1区東半では厚さ0.3m～0.4m、1区西半で約0.5m、2区西半で厚さ0.7～0.8m堆積する。

病院建設直前の耕作土は、厚さ0.2～0.25mの暗褐色砂泥1・暗オリーブ褐色砂泥・暗褐色砂泥2・黒褐色砂泥2（第2層）で、東からSN1、SN2、SN3と耕作面が段々になって西へ下がっていく。これら耕作面上面の標高は、SN1が標高48.5m、SN2が48.3m、SN3が47.3～47.6mである。

また、第2層の下層はにぶい黄褐色泥砂～砂礫層（第3層）が堆積する。この第3層はSN1で厚さ約0.2m、SN2で部分的に約0.05mの堆積が認められるが、SN3ではさらに褐色砂泥1などの旧耕作土が数層堆積しており、厚さ約0.4mと厚くなっている。調査では第3層上層で検出した最古段階の耕作面を第2面とし、その下層で検出した中世～近世初頭の遺構面を第3面として調査を進めた。とくに2区西半では、第3層下に中世の遺物を包含するSR215を検出し、粗砂から砂礫の流れ堆積を深い場所では約0.8mの厚さで確認した。

さらに、1区東端で古墳時代以前と想定できる、泥砂・粗砂から砂礫の流れ堆積を確認している。SX128として掘り下げたが、遺物は少量の土師器片のほかはほとんど出土しなかった。調査区中央部で明確に確認した基盤層も、流れ堆積によって形成された自然堤防と想定できる褐色砂礫層であることから、遺構が明確に確認できるようになる平安時代末期まで、地盤は安定しなかったようである。

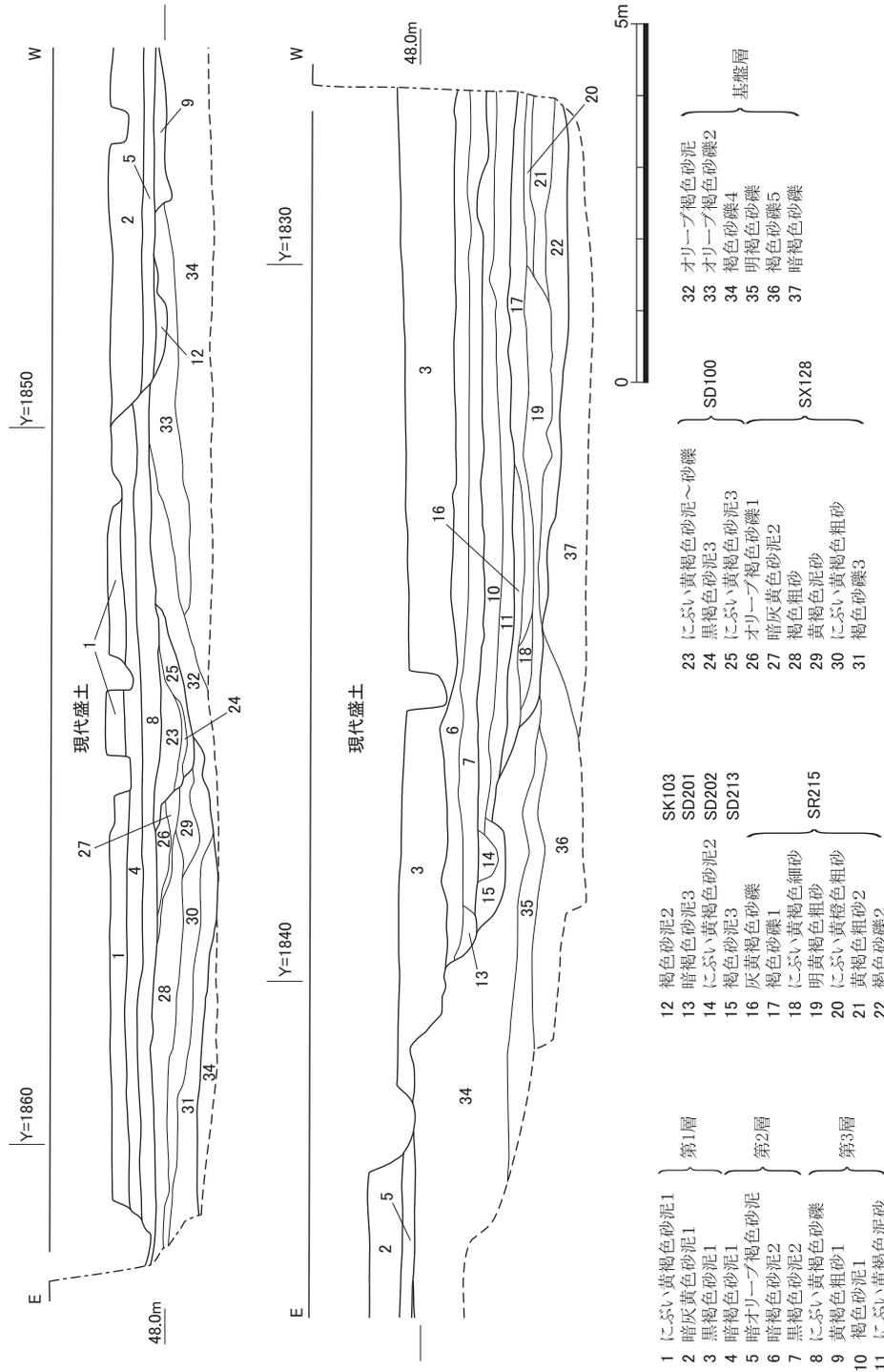


図81 中央東西畔の層位 縮尺1/100

## 3 遺 構

## (1) 中世以前の遺構 (図版15~18, 図82)

古代以前の明確な遺構は、ほとんど認められないが、1区北西隅から2区にかけて検出したS X120から弥生時代後期の土器がややまとまって出土しており、弥生時代まで遡る可能性がある。遺構は東西約5.5m、深さ0.2mほどの不整形な浅い落ち込みで、南北約2mを検出したが北端は調査区外に広がる。埋土は暗褐色砂泥の単層で、北東から南西に流れていた埋没流路の窪みに形成された遺構と考えられる。

また、1区東端中央部で検出したS X128は、南北最大約7m、東西7m以上の不定形な落ち込み遺構で、東は調査区外に展開する。層位のところで述べたように、粗砂~砂礫の流れ堆積であるが、調査区西へは展開しない。西端立ち上がり部に堆積した黄褐色泥砂層(図81第29層)から、古墳時代前期の土師器甕が出土している。

平安時代末期から室町時代にかけてのおもな遺構は、第3面として調査し、多くの土坑や溝などを検出した。明確な時期を示す遺物の認められない遺構が多いが、ここでは土坑8基、溝3条、落ち込み遺構2基、川遺構1条について報告する。

S K91・165・166は1区南端部で検出した円形土坑で、S K140も同じ性格の遺構と考えられる(図83)。S K165は検出した直径が最も小さく、直径0.8~1.0m、S K91と166はやや大きく直径1.0~1.3mである。深さは3基とも1.1~1.2mで、底部は標高47.1~47.2mであった。S K140はS K165に壊されていて形態が不詳だが、やや隅丸方形を呈しているようである。底部標高も47.5mとやや高い。切り合い関係や出土土器型式の観察から、中央のS K140・165が最も古く、北西のS K91がそれに次ぎ、南西に穿たれたS K166が最も新しいことがわかる。これらの遺構は、同一規模の円形土坑をやや場所を移しながら掘り直したと考えられ、素掘りの円形井戸の可能性もある。土師器皿を中心とする遺物が多く出土した。

S K60は1区南東隅で検出した池状の落ち込みで、北西には後述するS D123が取り付く(図84)。東西・南北ともに3mほど確認したが、東と南は調査区外に広がる。検出面から深さ約0.5mであるが、上層約0.4mまでは江戸時代前期の遺物を含む(S K60上層)。下層はオリーブ褐色から暗オリーブ褐色砂泥が互層状に堆積しており、底部にオリーブ褐色シルトが貼られていたようで、最下層には滞水堆積と考えられる黒褐色砂泥1・2が薄く堆積していた。池のような滞水遺構の可能性が高いが、現状では性格不明である。下層

京都大学病院構内A J 16区の発掘調査



図82 調査区第2・3面検出の遺構 縮尺1/250

遺 構

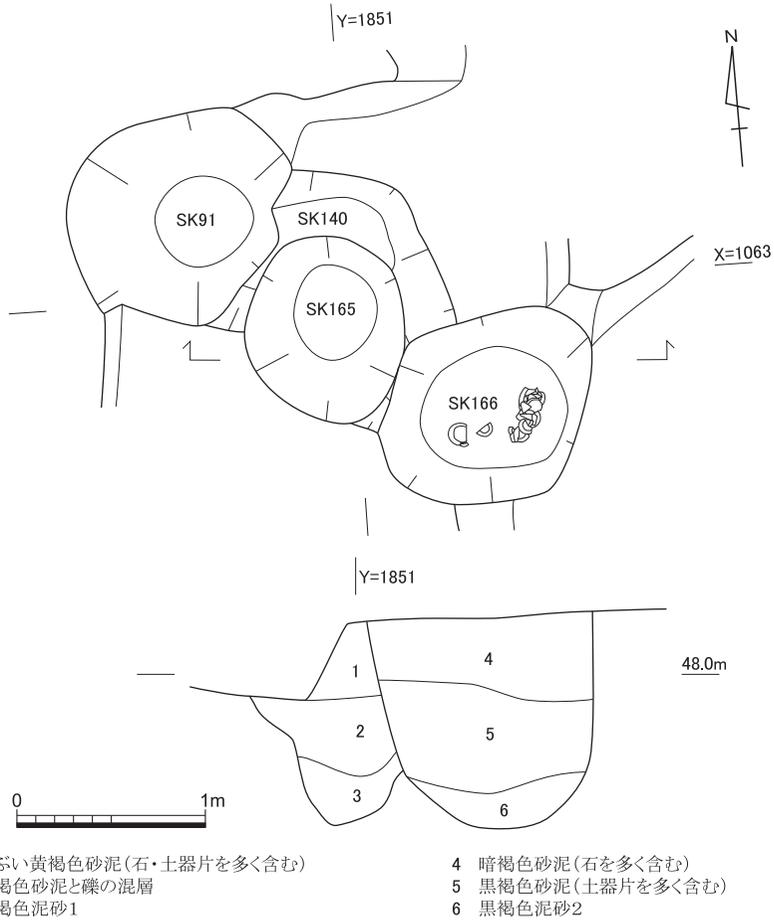


図83 S K 91・140・165・166 縮尺1/40

(S K 60下層)からは中世の遺物のみ出土するが、遺物の出土量は少ない。

溝はS K 60に取り付くS D 123がある。幅約1 m、深さ0.3~0.45mの斜行溝で、北に対して西へ約55°の傾きをもつ。底部レベルは北西で標高47.8m、南東で47.65mとなっており、緩やかに南東へ流れてS K 60に流れ込むことがわかる。遺物はほとんど出土しないが、中世の土師器片が出土した。S D 162は調査区南端で一部検出した、幅約0.8m、深さ0.15~0.4mの溝である。攪乱によって大半が壊されているが、S D 123に直行して取り付く可能性がある。

S D 100は1区中央部を斜行する幅1~3 mの溝である。北に対して東へ45°の傾きをもち、北東部で東へ屈曲する。北東部の底部レベルが標高47.6~47.7mなのに対し、南西

京都大学病院構内A J 16区の発掘調査

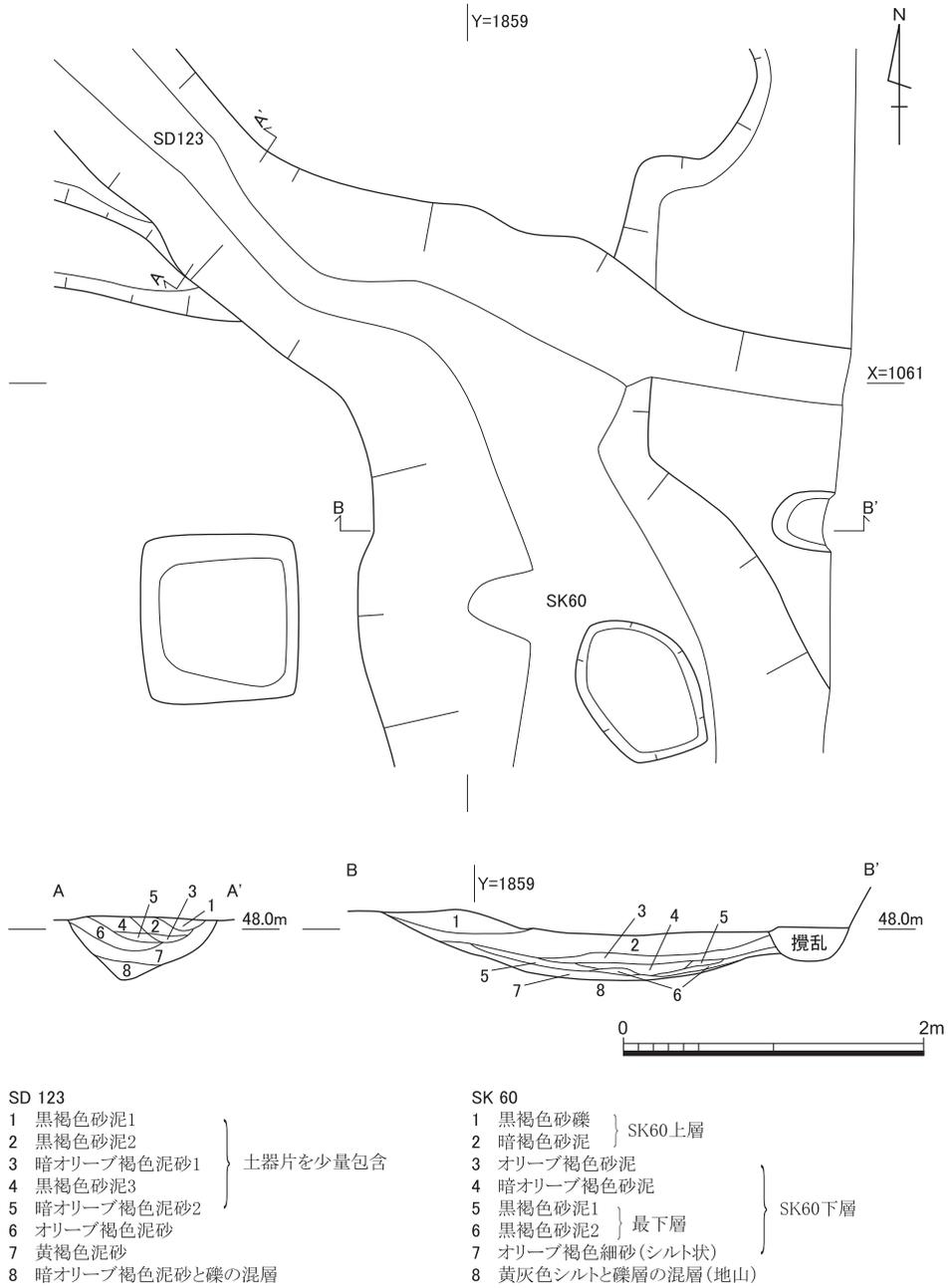
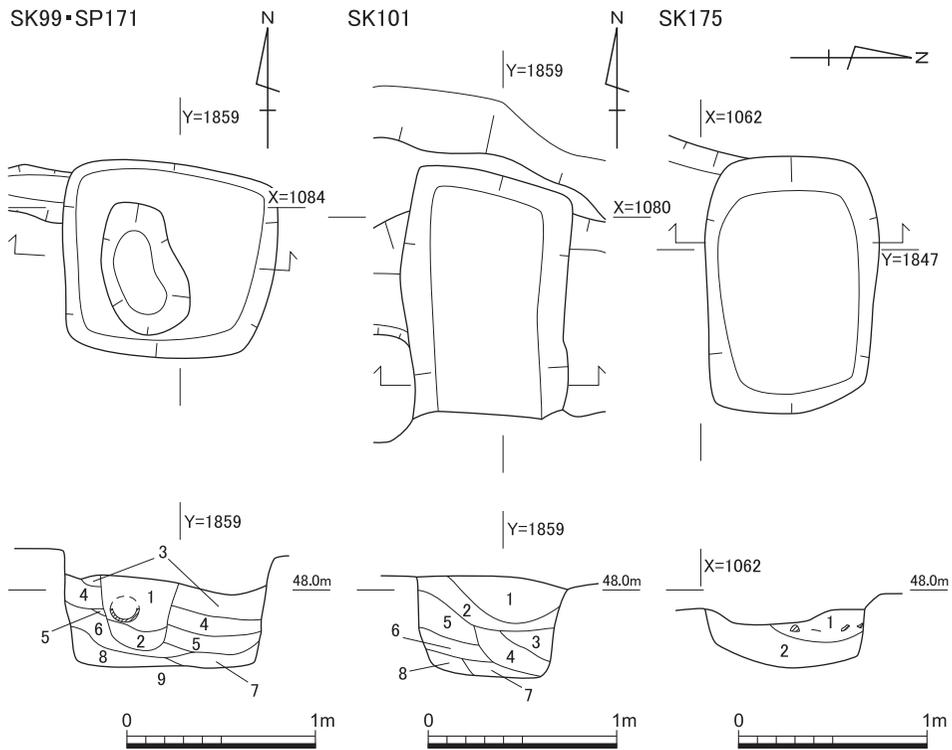


図84 SK60・SD123 縮尺1/50

遺 構



SK99

- 1 暗褐色砂泥 (SP 171)
- 2 暗オリーブ褐色泥砂1 (SP 171)
- 3 黒褐色砂泥
- 4 暗オリーブ褐色砂泥
- 5 褐色泥砂
- 6 オリーブ褐色泥砂
- 7 暗褐色泥砂とオリーブ褐色泥砂の混層
- 8 暗オリーブ褐色泥砂2
- 9 黄灰色砂層 (地山)

SK101

- 1 にぶい黄褐色細砂
- 2 暗褐色泥砂
- 3 褐色細砂
- 4 オリーブ褐色泥砂1
- 5 にぶい黄褐色細砂1
- 6 オリーブ褐色泥砂2
- 7 黄褐色細砂
- 8 にぶい黄褐色細砂2

SK175

- 1 暗褐色泥砂1 (土師器含む)
- 2 暗褐色泥砂2

図85 S K 99・101・175 縮尺1/40

部は標高48.0m前後で高くなる。北東部には下層に前述したS X128があり、その影響で深くなったと考えられるが、全体に流水堆積は認められず、にぶい黄褐色砂泥～砂礫や黒褐色砂泥3で人為的に埋め戻されている。やはり、遺物の出土量は少ないが、中世土師器片や輸入陶磁器などが出土している。

S X121は調査区北端で検出した、北東から南西への傾きをもつ幅約5mの溝状の落ち込みである。深さ約0.4mで、暗オリーブ褐色砂泥や黒褐色砂泥が堆積する。弥生土器や7世紀の須恵器も出土するが、主体は中世の土師器・瓦器・輸入陶磁器片である。S X120

と同様に下層の旧流路上にできた窪みの堆積層と考えられる。

このほか、1区で方形土坑S K99・101・175を検出している(図85)。S K99は1区北東隅部で検出した、東西約1.15m、南北約1mの正方形に近い土坑である。深さ約0.6mで、オリーブ褐色から暗褐色の砂質土が西側から流れ込むように堆積する。土師器・須恵器片のほか、鉄滓が出土している。S K101はS K99の南3mの地点で検出した、東西約0.85m、南北1.3m以上の長方形を呈する土坑である。南端は攪乱によって壊されている。深さ約0.5mで、S K99と同様に西側から砂質土が堆積している。遺物はまったく出土しなかった。S K175は1区南西隅部で検出した、東西約1.4m、南北0.9mの長方形を呈する土坑である。深さ約0.35mと浅く、暗褐色泥砂1・2が堆積する。土師器皿・白色土器高杯とともに常滑甕が出土した。

2区ではY=1838ラインより西で南北方向の河川S R215を検出した。東西幅は12m以上で西側はさらに調査区外に広がる。東岸部の標高は約48.1m、川底レベルは深いところで標高約46.0mとなっており、2m以上の段差をもつ。出土遺物は非常に少なく、中世らしき土師器細片を少量含む。また、上層から江戸時代初めの遺物が出土することから、少なくとも江戸時代初めまでは川として機能しており、それ以降耕地化が進められたようである。

## (2) 江戸時代から明治時代の遺構(図版18・19, 図86)

江戸時代初めの耕地化にともなう遺構は、第2面として調査しており、おもな遺構として畔1条と溝1条を検出している。

畔S A70は、X=1069.5ライン上で検出した高さ約0.15m、幅0.6~0.8mの東西方向の疑似畦畔である。攪乱が激しく詳細は不明だが、東に対して南へ4~5°振れている。このS A70の南側は攪乱土坑が多く穿たれているのに対して、北側は土坑が非常に少なく、土地境界として機能していた可能性がある。

S D213はS R215の東岸部、耕作地化にともない形成された約1mの段差の裾部に掘られた南北溝である。幅1.2~2m、底部レベルは標高約46.9mで、南へ非常に緩やかに傾斜する。

また、落ち込み状の遺構やピットを数箇所を確認している。S X57は1区のS D123の上層で検出した不整形な落ち込みで、S K60上層とともに耕地化にともなって以前の遺構の窪みを整地した遺構と考えられる。S P171は、S K99を切り込んだ長径約0.65m、短径約0.4mの不整形な小ピットで、完形の施釉陶器椀が埋納されていた。

遺 構

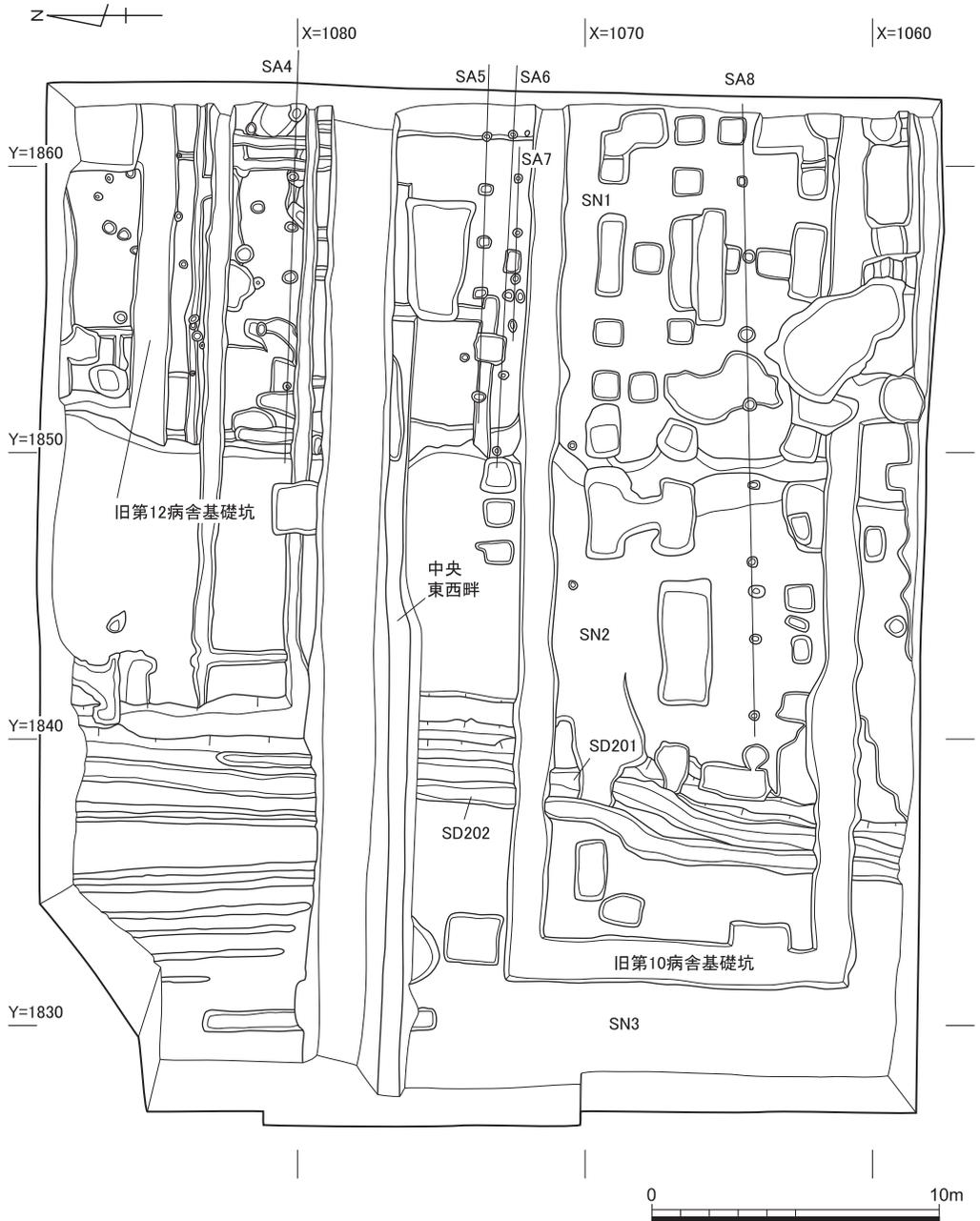


図86 調査区第1面検出の遺構 縮尺1/250

さらに、S A70の南に接して検出した円形土坑S K80は、直径約1.5mで漆喰によって壁面と底部を固めていた。これは後述するS N1の西畦畔にともなう肥溜と考えられ、時期も幕末から明治時代まで下がる遺構である。

江戸時代中頃から明治時代初頭の遺構は、京大病院建設直前の耕地関係の遺構面で、第1面として調査した。前述したように、東から西へ下がる耕作面S N1・2・3を検出しており、S N2とS N3との約1mの段差の裾部では、S D213の位置を踏襲したS D201およびS D202を確認した。S D201は耕作面の地上げにともないS D202を掘り直した溝である。また、S N1およびS N2の上面では、東西柵S A4～8を検出している。第2層を切り込んで柱穴が成立しており、耕作面よりも新しい柵である。

なお、京大病院関係の遺構は、明治時代の病院棟基礎を調査区北端と南半で検出している。栗石コンクリート基礎上に煉瓦を積み上げた遺構で、北側は明治37年に建てられた旧第12病舎、南側は明治36年に建てられた旧第10病舎である。病院病舎群は当初計画では一階建煉瓦建築であったが、財政悪化のため木造一階建病舎に計画変更された〔京都大学広報委員会1977〕。しかし、栗石を底に多量に入れた上に構築された煉瓦積基礎は、一階建て木造建築用としては、いささか大規模で堅固である。当初計画に沿って基礎を煉瓦で構築したが、設計変更のため上部構造だけを木造建築とした。あるいは予め煉瓦建築に変更される事を想定していたかのいずれかであろう。

#### 4 遺 物

今回の調査では、縄文時代から京都帝国大学附属病院時代までの遺物を、整理箱にして45箱分出土した。一時的に開発されたと考えられる平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物を除いて、奈良時代から平安時代中期までと、鎌倉時代後半から桃山時代までの遺物が極端に少なく、大半は近世以降の遺物が占めている。該当地区における周辺開発の消長を反映しているものとする。また、京都帝国大学附属病院時代の煉瓦・医療器具などの備品が出土したので併せて報告する。

##### (1) 縄文時代から飛鳥時代の遺物 (図版20, 図87)

Ⅲ1～Ⅲ12の土器は弥生時代の可能性が残るS X120出土遺物を除いてすべて混入遺物である。

Ⅲ1はS K166から出土した縄文土器である。縦4.0cm、幅5.0cm、器厚0.6cmの小片で、縦方向の縄文を外面に施す。外面表面と胎土の色調は暗茶灰色で、内面は淡橙色化してい

遺 物

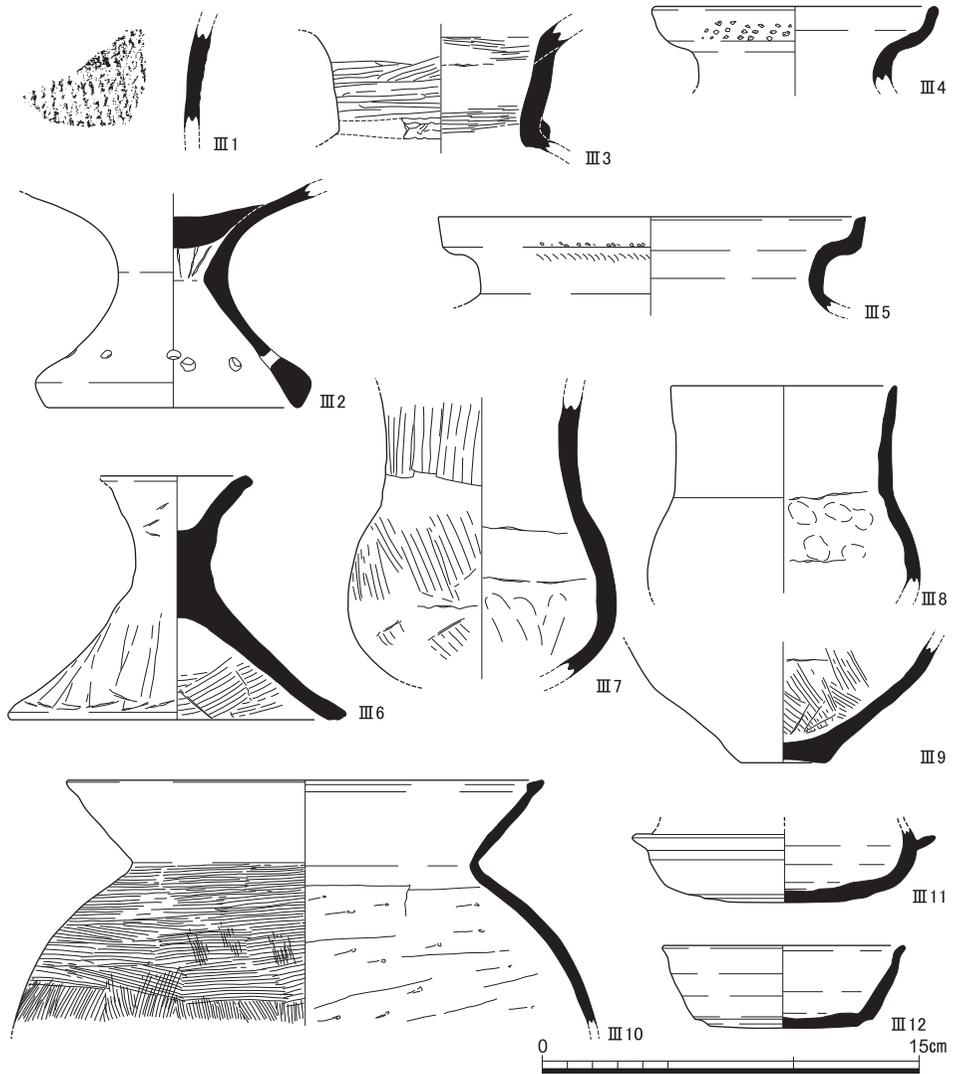


図87 S K166出土遺物（Ⅲ1縄文土器），調査区東端南部最下層出土遺物（Ⅲ2弥生土器），S X120出土遺物（Ⅲ3～Ⅲ9弥生土器），S X128出土遺物（Ⅲ10土師器），S X57出土遺物（Ⅲ11須恵器），S X121出土遺物（Ⅲ12須恵器） 縮尺1/3

る。胎土はやや粗く長石などを含み，焼成は縄文土器としてはやや硬質である。中期の船元式に比定される。

Ⅲ2は弥生時代中期後半のものと考えられる高杯である。調査区東端南部最下層から出土した。胴部と杯部の成形は，円盤充填法による連続成形技法を用いる。磨滅が著しく調

整は不明。脚部には円形の9方向透かしを外側から入れる。

Ⅲ3～Ⅲ9はS X 120から出土した、弥生時代後期後半から庄内式併行期に位置づけられる土器群である。しかし、同遺構からは須恵器・土師器・焼締陶器などの遺物も混在しており、一括性は低い。

Ⅲ3は広口壺の頸部である。外面は横方向の篋磨き、内面は横刷毛で仕上げる。頸部と体部の境に突帯を貼り付け、刻み目を入れる。Ⅲ4は受け口の壺口縁部である。口縁部は内外とも横撫でで仕上げ、口縁部外面に刺突列点文をめぐらす。Ⅲ5は受け口状口縁甕の口縁部である。口縁端部は面をもつ。外面は縦刷毛ののち横刷毛で仕上げる。内面は横撫です。口縁部外面に刺突文をめぐらす。Ⅲ6は蓋である。外面は縦方向の板撫で、つまみ部内面は撫で、蓋部内面は横刷毛する。Ⅲ7は短頸壺である。外面は粗い縦刷毛調整、内面は撫でで仕上げる。内外面とも粘土紐接合痕が残る。Ⅲ8は短頸壺である。磨滅が著しく外面調整は不明。体部内面上半は指押えする。Ⅲ9は壺もしくは甕の底部である。やや上げ底で、外面は刷毛目撫で消し、内面底部はクモの巣状刷毛目である。

Ⅲ10は、S X 128から出土した、布留式土器の甕である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は肥厚させる。体部外面は縦刷毛、上半は縦刷毛ののち横刷毛する。内面は篋削りする。外面には煤が付着する。

Ⅲ11はS X 57上層から出土した須恵器杯Hの身である。端部が欠落しているが、残存器高は2.9cmで、受部端で測った径は12cmである。焼成は硬く、色調は暗青灰色である。内側は立ち上がり部が体部から直接延び、受部は鏝のようにめぐる。受部上面立ち上がり脇に、蓋を重ね焼きした痕跡が残存している。底部外面は右回転篋削りである。受部の形態や胎土・焼成などから、田辺昭三編年〔田辺1981〕のTK216型式以降に相当する初期須恵器と考えられる。

Ⅲ12はS X 121から出土した須恵器杯Gで、口径9.4cm、器高3.3cmである。底部外面は篋おこし。底部と体部との境に浅い凹みがめぐる。焼成はやや甘く、色調は淡灰色である。田辺編年のTK46型式に該当し、飛鳥時代後半に想定できる。

(2) 平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物（図版21・22-1、図88～90）

Ⅲ13～Ⅲ51の土器群はすべて遺構にともなう一括遺物である。とくに、平安時代末期から鎌倉時代前半にかけての4基の重複した土坑群（S K 91・140・165・166）から出土した土師器皿群は、土師器編年の変遷を迫る好資料である。そのため、土坑別に口径1/4以上残存する計測可能な個体の法量表を図89として添えた。また、土師器皿型式と時代区分

遺 物

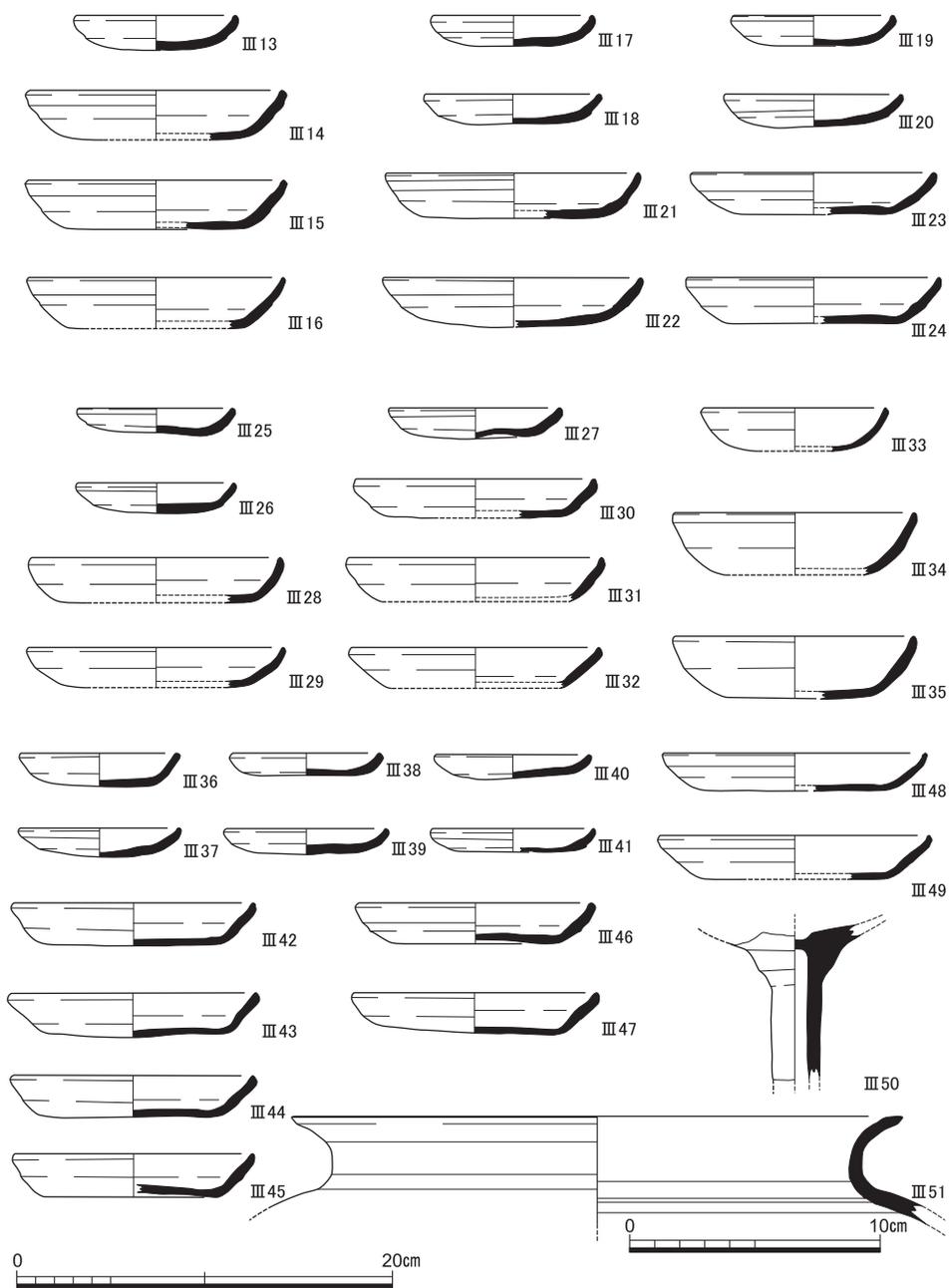


図88 S K165出土遺物 (Ⅲ13~Ⅲ16土師器), S K140出土遺物 (Ⅲ17~Ⅲ24土師器), S K91出土遺物 (Ⅲ25~Ⅲ35土師器), S K166出土遺物 (Ⅲ36~Ⅲ47土師器), S K175出土遺物 (Ⅲ48~Ⅲ50土師器, Ⅲ51常滑) (Ⅲ51は縮尺1/3)

京都大学病院構内A J 16区の発掘調査

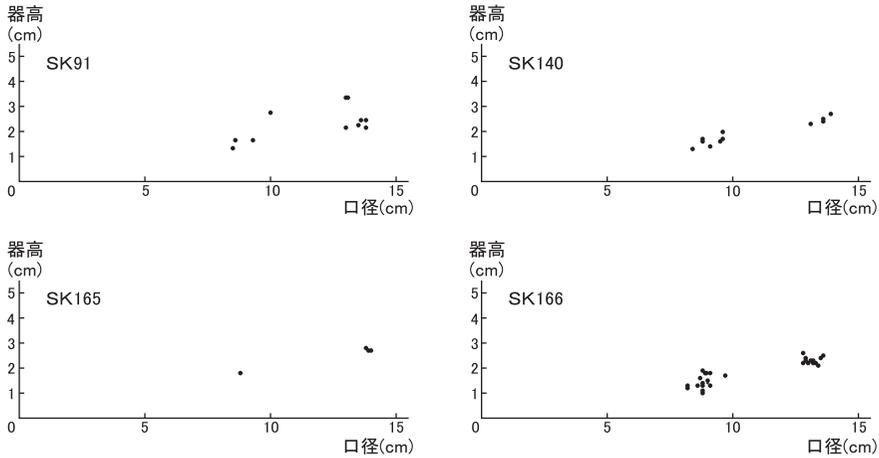


図89 S K 91・140・165・166出土土師器法量

は、宇野隆夫氏の編年〔宇野1981〕と、小森俊寛・上村憲章氏の編年〔小森・上村1989〕を併記する。

Ⅲ52～Ⅲ55は今回出土した軒瓦類である。すべて2次堆積によるもので、平瓦・丸瓦類もほとんど出土していない。すべて小型瓦で平安時代後期の棟・築地塀などに葺かれていたものと思われる。

**S K 165出土遺物(Ⅲ13～Ⅲ16)** S K 165の底から出土した橙褐色系の土師器皿群で、大皿(Ⅲ14～Ⅲ16)と小皿(Ⅲ13)に分類できる。大皿は口径の平均が13.9cm、器高2.7cmで、小皿は口径8.8cm、器高1.8cmである。大皿の口縁部外面に2段の横撫でを施している。ただし、端部が垂直に立ち上がる典型的な2段撫でと異なり、胴部傾斜に沿って直線化が進んだ弱い2段撫でである。大皿の口径・器高の平均値は比較したほかの土師器群と比べ最大である。胴部を形成する指押えによる折れ曲げ化が進行しているが、まだ腰部に丸みがある。口縁部内面の指押えと口縁1段撫でとの境に派生する横方向の稜線がわずかに認められるが、不明瞭である。小皿の器高は最も高い。宇野編年の平安京Ⅳ期、C<sub>4</sub>類。小森・上村編年でⅥ期古段階、平安時代末期(1180年頃)から鎌倉時代前期前葉(1210年頃)にかけての土師器皿群に比定できる。

**S K 140出土遺物(Ⅲ17～Ⅲ24)** S K 140の埋土から出土した橙褐色系の土師器皿群で、大皿(Ⅲ21～Ⅲ24)と小皿(Ⅲ17～Ⅲ20)に分類できる。大皿はすべて1段撫でで、色調もやや鈍い橙に変化している。大皿の口径平均が13.6cmで、器高平均は2.5cmである。指押えによる折れ曲げが明瞭となり腰部の丸みが消える。口縁部内面の指押えと口縁1段撫

での境に派生する横方向の稜線も明確になっている。小皿は口径平均9.1cm，器高平均1.6cmで，口径を除いてやや小型化している。宇野編年の中世京都Ⅰ期，D<sub>6</sub>類。小森・上村編年のⅥ期中段階，鎌倉時代前期中葉（1210～1240年頃）に比定できる。

**S K 91出土遺物（Ⅲ25～Ⅲ35）** S K 91の底付近から出土した土師器皿群である。鈍い橙色系の大皿（Ⅲ28～Ⅲ32）と小皿（Ⅲ25～Ⅲ27）のほかに，白色系の大皿（Ⅲ34・Ⅲ35）と小皿（Ⅲ33）が加わる。

橙色系の大皿口径平均は13.6cm，器高平均2.2cmである。小皿は口径平均8.8cm，器高平均1.5cmである。S K 140とほぼ同じであるが大皿の器高平均がやや低くなっており，小皿も全体に小型化している。

白色系の大皿は2個体出土したが，いずれも口径13.3cm，器高3.3cmと大型で，器厚も後出の白色系皿と比べて厚い。白色系小皿は口径10.0cm，器高2.7cmである。器厚は大皿に比べ薄い。白色系皿の出現期に比定できる遺物である。年代に関してはS K 140とほぼ同時期の鎌倉時代前期中葉に比定できる。

**S K 166出土遺物（Ⅲ36～Ⅲ47）** S K 166の底に多量に出土した土師器皿群である。大皿（Ⅲ42～Ⅲ47）と小皿（Ⅲ36～Ⅲ41）に分類できる。この土師器皿群は上記の橙色系土師器と異なり，色調が淡褐色化し，胎土も脆くやや粗い。大皿の口径平均は13.2cm，器高平均2.3cmで，口径が縮小するが器高は高い。小皿はS K 91出土小皿と同じ口径平均8.8cm，器高平均1.5cmである。大皿の立ち上がり部内面の指押えによる凹凸が顕著で，その上に軽い横撫でを施すに留まる。内面口縁部の稜線も明瞭で，横撫でによる口縁部上半の外反傾向が始まる。宇野編年の中世京都Ⅰ期，E<sub>1</sub>類に該当か。小森・上村編年のⅥ期新段階，鎌倉時代前期後葉（1240～1270年頃）に比定できる。

**S K 175出土遺物（Ⅲ48～Ⅲ51）** この遺物群は上記の土坑群の西約10mに位置するS K 175埋土から出土した。

Ⅲ48～Ⅲ49は橙色系の土師器大皿である。大皿Ⅲ48は口径14.1cmで，器高は2.0cm。大皿Ⅲ49は口径14.6cm，器高2.3cmで，いずれも口縁部外面に1段撫でを施す。宇野編年の中世京都Ⅰ期，D<sub>6</sub>類で，小森・上村編年でⅥ古～中段階，鎌倉時代前期前葉から中葉にかけての遺物であると考ええる。

Ⅲ50はいわゆる白土器の高杯で裾部と口縁部が欠落している。径約2.5cmの脚部は中が空洞で径約1.2cmの丸い棒状のものに粘土を巻き付けて形成されたと考えられる。断面形は面取りが省かれて丸く退化した形態となっている。杯部内面中央に径約2cm，深さ0.5

cmの凹みを有する。

Ⅲ51は推定口縁径48.8cmの常滑焼大甕である。口縁は外広がりで緩やかに外反し、口縁端部下面に斜め方向の面取りを施す。頸部は滑らかに湾曲する。暗緑色の自然釉が口縁上面と肩部に付着する。常滑焼大甕の初現形態で12世紀代の特徴が良く現れており、鎌倉時代に入ってから破棄されて埋まったと考える。

軒 瓦(Ⅲ52～Ⅲ55) Ⅲ52は小型の三巴紋軒丸瓦で外区に連珠紋を配す。S R 215から出土した。瓦当部と丸瓦部凹凸面の接合部に粘土を補充して撫で付ける。瓦当裏面下端は丸く撫でによる仕上げ。丸瓦部凹面に布目、凸面に縄叩きの痕跡あり。色調は白色で焼成は甘い。平安時代後期の山城産瓦である。

Ⅲ53はS K 60から出土した小型の蓮華紋軒丸瓦である。中心飾りに三巴、外区に連珠紋を配すが、周縁部を欠いている。瓦当部と丸瓦部凹凸面の接合部に粘土を補充して撫で付ける。色調は白色で焼成は甘い。平安時代後期の山城産瓦である。

Ⅲ54は小型の三巴紋軒平瓦である。第3層から出土した。顎形態は段顎である。顎貼り付け式か半折り曲げ式であるか不明である。平瓦部凹面端部まで粗い布目、凸面瓦当部に補充粘土の撫で付け跡と横撫でがみられる。焼成は甘く、表面に炭素吸着がある。平安時代後期の山城産瓦である。

Ⅲ55は小型の三巴紋軒平瓦で第2層から出土した。断面の顎形態は撥型であるが直線顎に近い。焼成は良好で、色調は淡灰色。平瓦部凹面端部に布目痕の上に平坦な幅約1cmの篋削りを施す。下顎部を除き凸面に斜め方向の縄叩きを施す。讃岐産瓦で時代も上記のものと同じであろう。

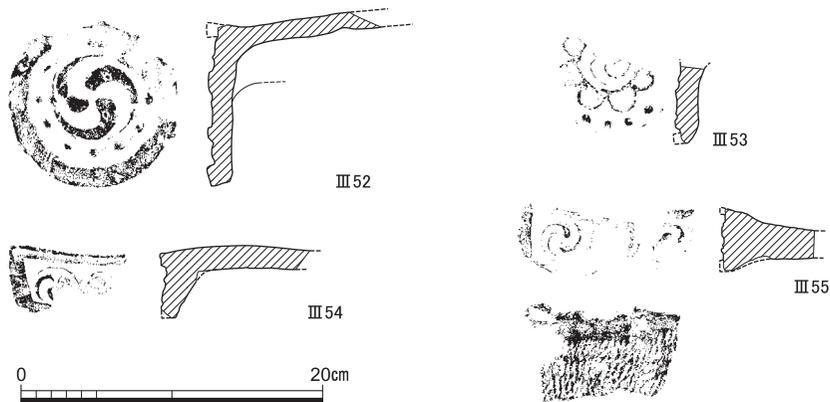


図90 軒丸瓦(Ⅲ52・Ⅲ53)、軒平瓦(Ⅲ54・Ⅲ55) 縮尺1/5

## (3) 江戸時代から明治時代の遺物 (図版22-2, 図91・92)

江戸時代前期から遺物の出土量は急激に多くなる。遺物内容は京内との差をさほど認めないが、肥前陶磁器が多く、土師器は微量である。遺物の多くは小片で実測可能な遺物も少ない。調査地が再開発された江戸時代前期から幕末・明治時代前半までの実測可能な遺物について報告する。

第1層北端で出土したⅢ56は口径12.6cm、器高4.2cmの灰釉唐津皿である。轆轤成形の口縁部を折れ縁にした小皿で、内面底に4個の胎土目による重ね焼きの熔着痕が残存する。胎土はやや粗く、灰白色であるが、底部は橙色に変色している部分がある。焼成は良好である。高台は腰まで3段の横方向削り出し、とくに高台脇に鋭い括れをめぐらす。高台裏は兜巾と呼ばれる円錐状の削り残しが微かに残存し、畳付から中心部までは軽い削りである。畳付部分も平坦に削り、幅をもたしている。口縁部は腰から斜めに直線に延び端部を丸く収める。釉はやや緑がかった灰色で、内面全部と外面の胴部腰回りまで不均等に掛ける。16世紀末に広く流通した美濃産灰釉皿の影響を指摘でき、胎土目と砂目の並行期である1610～1650年代に生産年代を比定できる〔盛2000〕。

S X57出土遺物 (Ⅲ57～Ⅲ59) Ⅲ57は灰釉唐津碗の可能性が高いが、胴部を欠いているため確定できない。胎土は灰色である。高台裏も含めて全面に鉄漿が掛かる。さらに灰釉が鉄漿の上に掛かり茶緑色を呈す。内面見込に重ね焼きのための蛇目釉剥ぎが施されている。釉薬を刷毛で塗りわけてあるように見えるが、蛇目釉剥ぎの際付着した磨き状の痕跡から釉剥ぎと判断した。しかし、釉薬を掛ける前に鉄漿が塗ってあり、釉剥ぎ後に鉄漿をふたたび塗ったか、鉄漿が深く器体に染み込んでいたかは不明である。蛇目釉剥ぎの外周付近に高台畳付に付着させた砂目の重ね焼きの痕跡が円状に残り、高台畳付部分にも砂目が付着する。高台の削り出しは高台脇が0.8cmに対し、内側が1.3cmで、内側の方が深く削られている。畳付とその外周に削りを施す。見込が蛇目釉剥ぎであることから生産年代を17世紀後半から18世紀代に比定できる。碗だとすれば高台の特徴から18世紀の前半までに絞り込める〔盛2000, 佐賀県立九州陶磁文化館2007〕

Ⅲ58は口径30.8cm、器高10.5cmの象嵌花草三島手唐津大皿である。胎土は密で、赤褐色である。焼成は良好である。胴部から口縁部を外反して折れ縁とし、端部を少し摘み上げる轆轤成形である。胴部に腰があり、腰から下を削り込み、高台脇から畳付けにかけて3段削りを施して高台を形成している。高台内面はコの字に大きく削り調整する。高台脇から胴部腰回りにかけて、刷毛で鉄漿を塗って黒褐色に発色させているが、高台外側の畳

付から2段の削りは露胎であり、鉄漿を塗った後削り込まれたものと思われる。内面の模様は篋などによって施された圏線で同心円状に端部まで区切られ4区の円帯をなし、内から外にかけて押印でよろけ縞・菱繋ぎ・花唐草・剣先蓮弁の順番に同心円状に模様をめぐらす。それらの凹みに白土で象嵌を施し、その上から透明に近い灰釉を塗っている。外面も腰より上部は灰釉をかける。見込み部に砂・胎土目による重ね焼きのための砂目跡が付着する。砂目は粗く大きく拡散しており17世紀から18世紀にかけて盛行する象嵌花唐草大皿の中でも後出の製品であろう〔大橋2003, 佐賀県立九州陶磁文化館2008〕。畳付外縁に重ね焼きの際に付着した釉が一部微かに見られるが明瞭ではない。

Ⅲ59は京焼風肥前陶器平椀である。胎土は密で焼成も良いが白黄色で軟質。高台は断面長方形で角張っている。平坦で円滑な高台裏中央に円圏があり、その付近に草書体で縦に「清水」と陰刻された落款がある。この落款は「水」の最後の跳ねが大きく左側に湾曲し、そこだけが太く深い。ほかに類例を見ない。口径・器高とも欠損して不明であるが、胴の器厚は薄手である。釉が灰色掛かったクリーム色に発色する。肥前では18世紀後半になると「清水」の落款が消えるので、初出の1650年代後半から1750年代までに収まるものと考え<sup>(1)</sup>。

**S P 171出土遺物** Ⅲ60は完形の施釉陶器茶椀である。胎土は密であるが灰白色でやや脆い。高台断面はアーチ状に凹むいわゆる饅頭心型である。釉は乳白色に濁った黄灰色で、高台内面も含めて全面に施されているが、畳付部分だけは削りによって釉が掻き取られている。産地・時期とも不明である。

**S K 60上層出土遺物** Ⅲ61は堺産すり鉢である。口径18.9cm, 器高10.5cmを計る。焼成は良好で、胎土・器表とも赤褐色を呈している。胎土には長石が少量ながら含まれている。内面のすり目は10本が1単位で、底部で相互に重なり合う。口縁内面は横撫でによって内湾して盛り上がり、器具による沈線によって2本の凸帯が廻る。外側に出っ張る口縁外面は、2本の沈線による3本凸帯の縁帯がめぐっている。底面はほぼ平坦で無調整。時代は18世紀後半代に比定できる。

**S D 201出土遺物** Ⅲ71は型打ち成形の白磁紅皿である。内面全体と外面口縁部に釉を掛ける。内面に鉄釉による斑点がある。胴部外面を貝殻状の細い沈線でめぐらす。高台畳付に型押し成型時の皺が見られる。肥前では18世紀以降から19世紀半ば頃まで盛行する器形である〔野上2000, 佐賀県立九州陶磁文化館2005〕。

Ⅲ73は箱庭道具の型作り素焼き吊り燈籠である。2個の型を合せて作った痕跡が縦の筋

遺 物

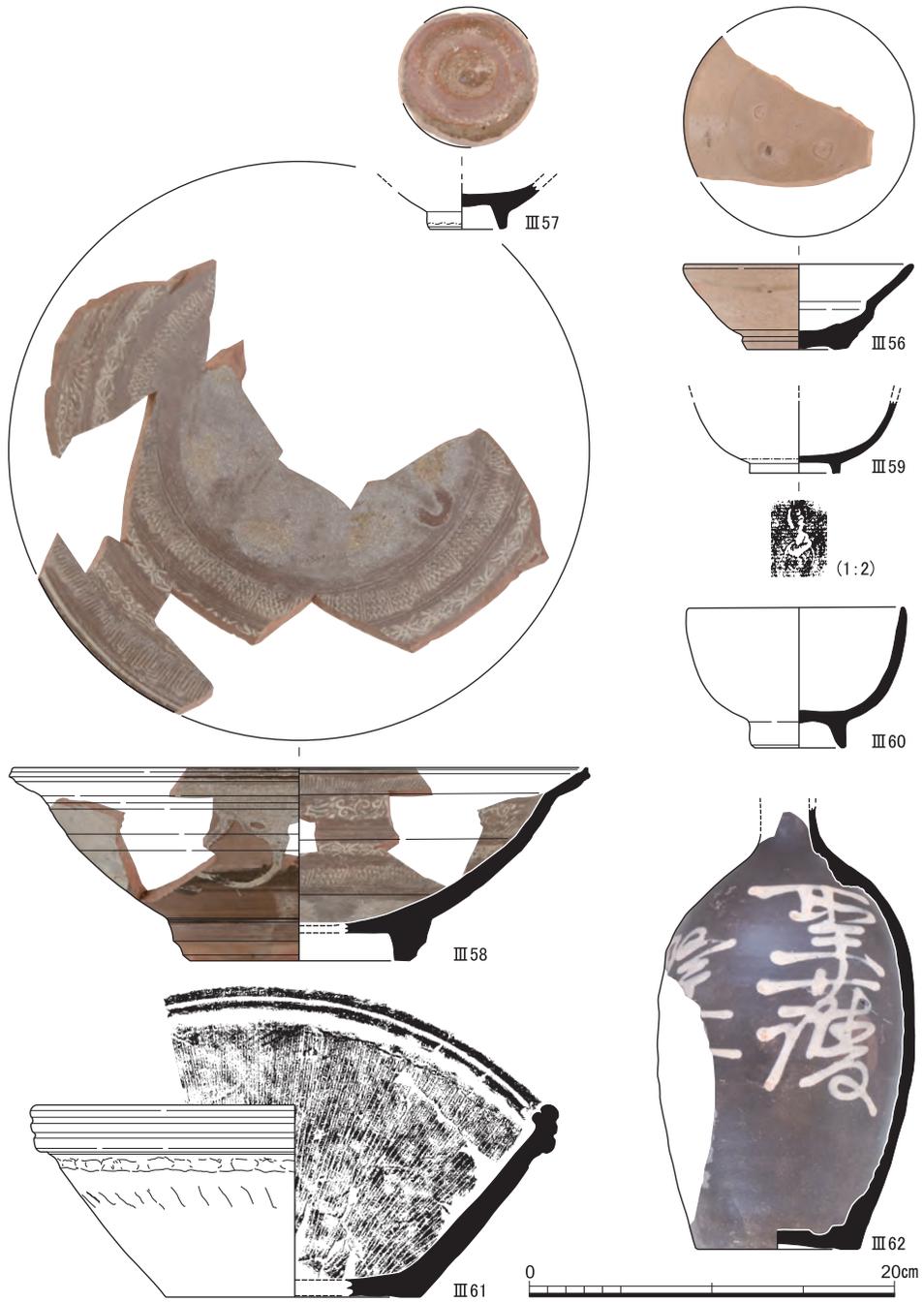


图91 第1層出土遺物 (Ⅲ56唐津), S X57出土遺物 (Ⅲ57陶器, Ⅲ58唐津, Ⅲ59肥前), S P 171出土遺物 (Ⅲ60陶器), S K 60出土遺物 (Ⅲ61陶器), 包含層出土遺物 (Ⅲ62陶器)

として残る。体部は六角で底に固定もしくは宙に浮かすために釘穴風の径0.2cmの穴が空いている。色調は淡橙色である。

Ⅲ76は素焼き型作り芥子面で、兜を被った武士を表す。裏面に深い凹みを有す。芥子面は座敷で大人が指人形として遊ぶ遊具で、19世紀前葉より出土例が多くなる〔安芸2001〕とされている。色調は淡橙色である。伏見人形窯元に同一のものが残存している〔奥村1976〕。

**包含層出土遺物** Ⅲ62は口縁部が欠損している残存器高24.3cm、底径7cm、胴幅15cmの肩部がやや張ったいわゆる貧乏徳利である。胎土はやや粗く、轆轤による水引成形で内面に轆轤目が残る。底部と肩部を除いて器厚は薄く0.5cm前後である。外面は底部を除き暗茶褐色に発色する釉が全面に掛かる。その上から胴部に白釉で「聖護院□」と草書体で縦2列に書く。反対側に縦に「濤□仙」とあり、その横に2文字からなる記号もしくは屋号が書かれているが、判読できない。内面全面に鉄漿が塗られている。丹波産の可能性が高いが確定できない。明治時代前半の徳利であろう。

Ⅲ63～Ⅲ68は素焼き型作りの泥面子類である。攪乱・第1層掘り下げ・京大病院整地層などから出土した。淡橙色で径約3cm内外のものが多いが、Ⅲ68だけは2.2cmで小型である。厚さはすべて約1cm弱である。断面は長方形もしくは台形状で、裏面は平坦である。19世紀前葉以降急増し、19世紀中葉に減少する〔安芸2001〕とされている。京都では泥面子の多くは伏見人形窯元が製作していた〔奥村1976〕。

Ⅲ69は端部器厚1.4cmの蓮葉文素焼き型である。色調は赤みがかかった橙色である。蓮葉文凹凸が逆でネガ・ポジとなっている。模様面の器表は素地と同一であり、真土などがわかれる鑄造鑄型ではない。陶器の型である可能性が高い。調査地を東西にわたる近世の段差で検出した。

Ⅲ70はままごと道具の緑釉椀である。高台部を含む外面は型作り成形。低火度釉の透明感のある緑釉を、内面全面と外面口縁部に掛ける。高台などは淡橙色の露胎で、1度焼成の可能性もある。第1層から出土。

Ⅲ72は天守閣を模した型作りの箱庭道具である。第2層掘り下げ中に出土した。甍の鯨部分を欠いている。前面と側面の石垣部分を緑釉、第1層を白色釉、第2層から屋根までを青色の釉で彩色している。第2層の窓と軒下を白色釉で描く。裏面と底は平坦で淡橙色の露胎のままである。

Ⅲ74は第1層から出土した型作り素焼き土人形で、座像恵比寿である。前面と背面の2

遺 物

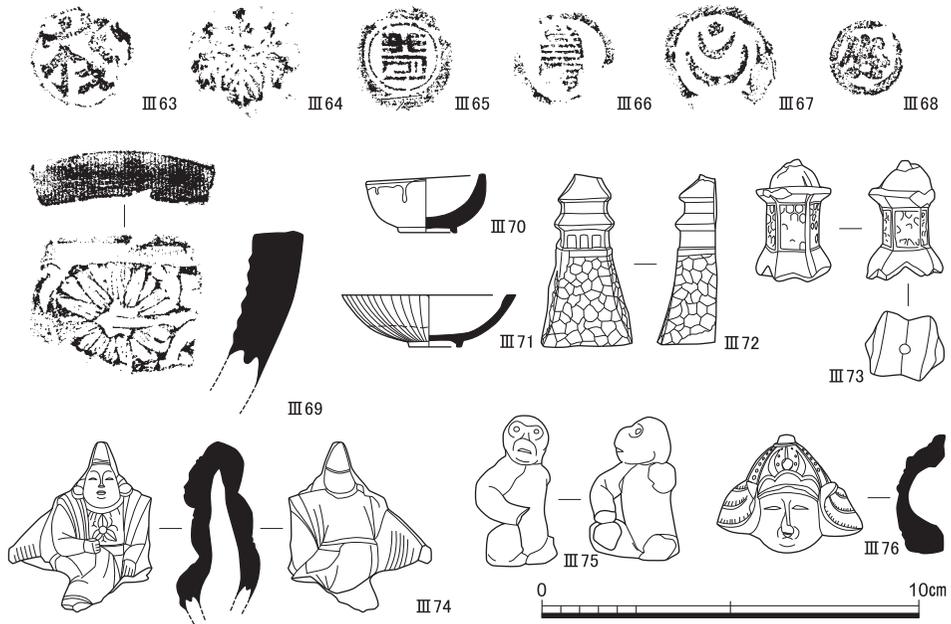


図92 S D 201出土遺物（Ⅲ71白磁，Ⅲ73・Ⅲ76玩具），包含層出土遺物（Ⅲ63～Ⅲ68泥面子，Ⅲ69素焼き型，Ⅲ70・Ⅲ72玩具，Ⅲ74・Ⅲ75土人形） 縮尺1/2

個の型に粘土を薄く詰め両方を合わせて接合する。宝袋を脇に添え袋口を左手で握っている。恵比寿像と判断した。色調は淡橙色である。伏見人形である可能性が高い。

Ⅲ75は第3層上層掘り下げ中に出土した土人形で、手捻り素焼きの猿座像である。胴部と4肢を粘土紐状にして別に成形し接合。頭部は粘土を丸めて成形し、顔面だけを型打ち成形する。色調は淡橙色である。

(4) 京都帝国大学附属病院時代の遺物 (図版23, 図93・94)

明治32年に創設された京都帝国大学附属病院関連の遺物を報告する。Ⅲ77～Ⅲ80は煉瓦類で、Ⅲ81～Ⅲ100は附属病院で使用された食器類・医療器具・文房具などである。

**煉 瓦 (Ⅲ77～Ⅲ80)** 煉瓦は耐火煉瓦と考えられるⅢ80を除き、京都帝国大学附属病院の「第10病舎」と「第12病舎」の掘り込み煉瓦積基礎用の建築用刻印煉瓦類である。いずれも重機掘削後、モルタルコンクリートで固められた目地を外して収納した。

煉瓦寸法はメートル単位系への統一化と工業製品の標準化・規格化のために大正14年に商工省告示12号で告示されたJ E S「普通煉瓦」によって、J A S規格と同様の長さ21cm、幅10cm、厚さ6cmに決定されたが、今回検出した煉瓦類はすべてそれより大型である。ま

た、明治38年に発表された関西地方で使用されている煉瓦寸法によれば、寸法が5種類あり規格統一化が課題とされていた〔水野1993・1999〕が、今回出土した病舎基礎の煉瓦寸法も不揃いで規格化される前の状況を反映しているものと思われる。これらの煉瓦には、明治20年代以降徐々に普及してきたワイヤーカット式機械抜き成形法による、上面と底面に付着する縮麵状の痕跡が無く、井桁木枠による手抜き手作り煉瓦類と考える〔水野1993・1999〕。建築用煉瓦の胎土は精良・赤褐色、焼成も良好で、刻印のないものが圧倒的に多かった。

Ⅲ77は長さ22.4cm、幅11cm、厚さ6.5cmで、桜花章をかたどったと思われる粗い刻印を捺す。この刻印は明治23年の旧関西鉄道株式会社（JR草津線）の諸施設で使用していた〔水野1993〕とされている<sup>(2)</sup>。

Ⅲ78は長さ22.3cm、幅10.5cm、厚さ5.2cmで、厚さがⅢ77と比べて薄い。小判型の陰刻の中に「三」の字が陰刻で表されている。職工の責任印である可能性がある。

Ⅲ79は長さ22.8cm、幅10.7cm、厚さ5.8cmで、陰刻の「×」マークを捺す。この「×」マークは明治26年創業の岸和田煉瓦株式会社の徽章であり、製造者が特定できる煉瓦である。類例は明治32～36年にかけて建設された日本銀行大阪支店や、大正元年に竣工した同志社女子中学・高校の清和館などがある〔門田1994〕。

Ⅲ80は両端が欠けているため長さが不明であるが、幅11.2cm、厚さ5.2cmで、大型の煉瓦に分類できる。側面の片方だけが焼締陶器状の茶褐色で、ほかはクリームがかった橙色を呈する。胎土は粗く、長石とシャモットと呼ばれる赤褐色の粒子（建築用赤煉瓦を砕いた粉）を多く含む。胎土と色調から白煉瓦と呼ばれた耐火煉瓦である可能性がある。陰刻の「□ZEN-INE□」の下にマルハ印と上に馬蹄形の枠内に三菱印を陰刻で表す。刻印は両端が欠けているが、備前市伊部に明治29年創業した備前陶器株式会社伊部工場の社印か、明治42年に日本窯業株式会社を買収された後の日本窯業株式会社備前支社伊部工場の社印を示す「BIZEN-INE」である可能性が高い。なお、これらの会社は、大正5年に品川白煉瓦株式会社を買収されている。類例には、明治45年に竣工した大同生命福岡支社で使用されたタイルに、陽刻で「BIZEN INBE」の社印があることが判明している〔水野1999〕。マルハは現在の福岡県または窯業の社印で昭和29年の創業とされるが、遡って三井染料工業所からの流れがある〔水野1999〕とされ、マルハの社印もどこまで遡るのか不明である。また、三菱印との関係も不明である。この煉瓦だけが上述の建築用煉瓦類と異なっており、病舎の基礎に用いられた煉瓦ではないと考えられる。

遺 物

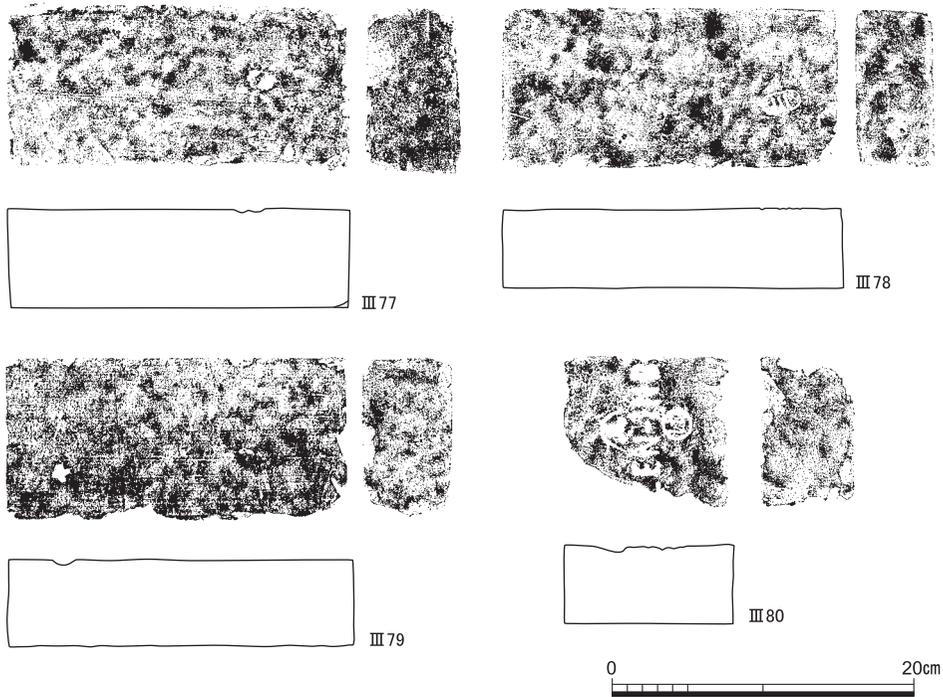


図93 煉瓦（Ⅲ77～Ⅲ80） 縮尺1/5

京都帝国大学附属病院関係遺物（Ⅲ81～Ⅲ100） Ⅲ95の染付製煙管，Ⅲ96のガラス製薬瓶，Ⅲ100の石版を除き，すべて近世耕作面を整地した段差付近の攪乱から出土した。

Ⅲ81は口径12.5cm，器高4.3cmの磁器製の井鉢の蓋である。生地は白色で，透明釉が掛かる。胴部外面に手書きで旧字体の「醫院」を篆刻風に右側から横に青で書かれている。「醫院」は大学附属病院のことを示し，以下の食器類に見られるものである。皿とすると横から見て医院の字が逆になり，内面無地であることから蓋と判断した。井鉢蓋は蓋を開けた後，つまみを高台にして逆さまに置くので，畳付と高台面取り部だけは素地である。

Ⅲ82はⅢ83とセットになると考えられる口径12.5cm，器高3.2cmの磁器製井鉢蓋である。端部が外反しⅢ81と比べ器高が低い。生地は白色で，釉調はやや黄味を帯びる透明釉が掛かる。Ⅲ81と同方向に手書きの青で「醫院」のマークが入り，その反対側に青で「賄」の字が見える。大正5年に附属病院西構内に「賄所及洗濯所」が完成している〔京都大学広報委員会1977〕ので，「賄」は「賄所」の備品として所属を表す可能性がある。Ⅲ82も畳付と高台面取り部を除いて全釉であるが，高台内側の面取りがない。

Ⅲ83はⅢ82とセットになる口径13.7cm，器高8.8cmの磁器製井鉢である。端部が外反し，生地・釉ともにⅢ82と同一である。胴部外面のやや上方に手書きの青で「賄」と書かれている。畳付と高台内外の面取り以外全釉である。

Ⅲ84はⅢ83と同じ器形で口径12.9cm，器高8.8cmの井鉢である。胴部中央に手書きの青で「醫院」のマークが入る。反対側に欠けた「賄」の文字が残存する。白色の素地がⅢ83と比べやや粗く，割れ口がザラザラしているので陶器の可能性もある。透明釉であるがやや黄色を帯びて発色している。

Ⅲ85は口径18cm，器高10.7cmの磁器製ロートである。逆円錐形で，底にパイプ状の排出口が開く。素地は純白で，透明釉を施す。ロートの固定器に収まるように口縁部が外側へ張り出し，その下部を蓋の返りのように直角にした部分に，アルミナ砂を塗布しザラザラさせている。ほかは全釉である。胴部下部に青で2行にわけて「京都陶器株式會社」と手書きされている。

Ⅲ86は口径10cm，器高5cmの磁器製椀である。生地・釉ともⅢ81に類似する。高台畳付の内外に面取りを施す。内面の見込みに手書きの青で「醫院」のマークが入り，口縁端部外面に2本の青い圈線をめぐらす。高台内面に青の圈線の中に手書きの青で「陶器會社精製」と書かれている。

Ⅲ87は口径6cm，器高4.1cmの磁器製寸胴形高台付計量カップである。素地は白色で，畳付付近を除き透明釉を施す。胴部内面に0.9cm間隔の二本の青い平行線が，計量値を示す圈線としてめぐる。下線と上線までの容量は，それぞれ15ccと32ccである。下線の下に青の手書きで右から横に「一食ヒ」とあり，下線の上に「二食ヒ」と書かれている。この「ヒ」は匙の略語で，15ccが1単位であったと想定する。胴部外面の口縁部付近に右から「京都帝國大學薬局」と横方向に青で手書きされている。昭和24年に国立京都大学と名称が変更されているので，それ以前から使用されていた計量カップである。なお，器表全体がザラザラに荒れており，強い酸性薬物によって侵された理化学用品である可能性が高い。

Ⅲ88は口径4.4cm，器高4.7cmの透明ガラス製高台付計量カップである。口縁部には三角状に突起した小さな注ぎ口がある。口縁端部上面は注ぎ口上面も含めて平坦なスリガラスとなっている。底部に低い高台を設ける。内面底部も高台に沿って円状に凹む。胴部外面に凸線で方形に囲い，枠中央部に計量のための水平方向の凸線を入れる。その線を挟んで下に「壺食ヒ」，上に「二食ヒ」と右側から左方向に向かって陽印されている。その反対側の胴部外面下半部に2列にわけて「□（帝カ）國」と「□（薬カ）局」の縦方向の陽印

遺 物

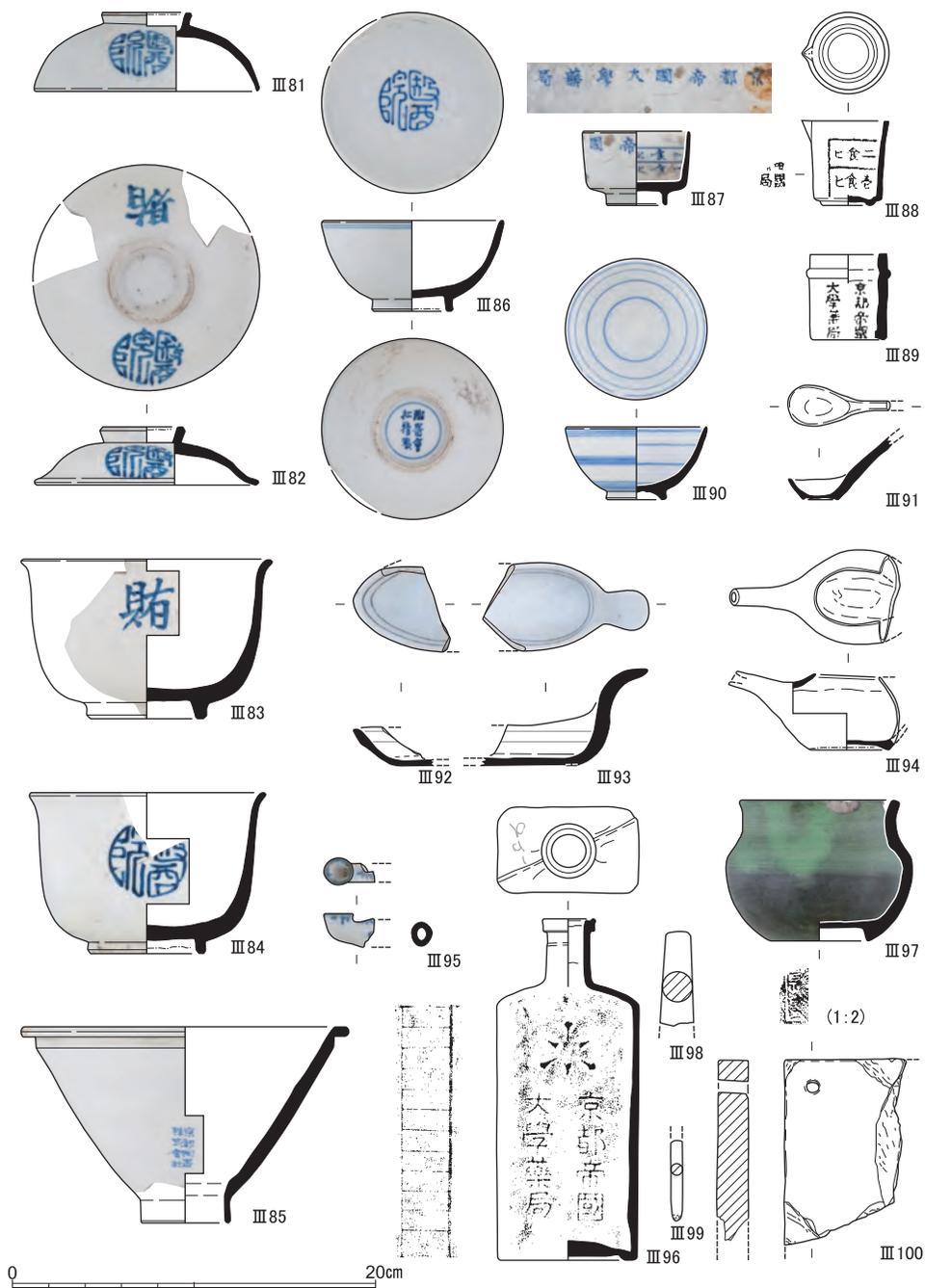


図94 京都帝国大学附属病院関係遺物 (Ⅲ81～Ⅲ87・Ⅲ90磁器, Ⅲ88・Ⅲ89・Ⅲ96ガラス製品, Ⅲ91～Ⅲ94白磁, Ⅲ95染付, Ⅲ97瓦質土器, Ⅲ98～Ⅲ100石製品)

がある。割れのため上部が欠落しているが、Ⅲ87と同じく「京都帝國大學藥局」と記されていたはずである。

Ⅲ89は乳白色不透明ガラス製寸胴形薬品容器である。口径4.2cm，器高4.7cmで，端部上面を平坦なスリガラスにしている。胴部外面上方に蓋の受け部となる凸帯がめぐる。胴部外面に2列にわけて「京都帝國大學藥局」の陽印を有す。形状から軟膏入れの可能性が高い。

Ⅲ90は口径7.8cm，器高4cmの磁器製小型椀である。素地は白色で，透明釉を施す。高台内の凹みはアーチ状に回転削りで形成する。高台内面と畳付以外は全釉である。内面に目盛状の4本の青い水平線を圏線にしてめぐらす。外面胴部には装飾のための複数の青い圏線を端部・中央・高台脇に配する。外面の圏線は明らかに装飾のためであり，内面の圏線も容量が下段から順に2cc，14cc，39cc，68ccで，規則性がないので計量に用いられた可能性は低い。

Ⅲ91は幅2.2cm，匙部長軸3.3cm，匙部器高1.1cmの小型白磁匙である。胴部の傾斜に沿って高く伸びる取手部の先端は欠損している。素地は白色で，透明釉を施す。置けるように楕円形の高台を有する。素地の高台内面と畳付以外は全釉である。小型であることから薬の調合用に使用された理化学用品と考える。

Ⅲ92・Ⅲ93は白磁計量匙である。Ⅲ92とⅢ93は同一個体ではないが，同型の可能性が高い。Ⅲ92を匙先端部とし，Ⅲ93を取手部とすればレンゲと同型となる。素地は白色で，透明釉を施す。匙内面胴部に計量の目安となる0.5cm間隔の黒い2本の平行線が水平にめぐる。取手は胴部に沿って反り上がり，先端部が外反する。匙底裏面は素地のままで，Ⅲ93の匙裏には左右2個所に据わりを良くするための丸い突起物が付く。Ⅲ92の先端部底に突起物はない。

Ⅲ94は白磁水注である。素地は白色で，透明釉を施す。近代的なスマート感のある器形で，胴部は平面・立面とも楕円形である。長軸方向に付く細い注ぎ出し部が胴部長軸部分からやや上向きに流線形状に長く伸びる。上面に開けられた口は楕円形である。底部裏はやや湾曲して凹む。楕円形の畳付部分だけが素地で，内面も含めて全釉である。後方部欠損のため取手の有無は不明である。

Ⅲ95は京大整地層から出土した磁器製染付煙管である。素地は白色で，透明釉を施す。火皿の口径は約1.8cmで，首部断面形は縦に長い楕円形である。火皿口縁に染付の縁取りがある。また，染付が首部上方と脇に見られるが，破片のため模様は不明である。

Ⅲ96は重機掘削中に出土したやや青味がかかった透明ガラス製薬瓶である。胴部は長方形で高さ15cm、幅7.9cm、厚さ4.7cmを測る。その上に径2.4cm、高さ3cmの円筒状の頸部と外側に帯状に張り出す径2cm、高さ0.7cmの口縁部が取り付く。胴部縦対角線上にガラス型の合わせ目が微かな段違いになって残る。口縁内面は栓で密封するためスリガラスにしている。底部は方形の高台状になり凹んでいる。内面底はガラスがアーチ状に盛り上がり肉厚になっている。胴部正面上方に京都市の徽章が陽印され、その下に縦2列にわけて「京都帝國大學薬局」の陽印がある。また、胴部左側面に目盛として1cm間隔の横線が12本陽印されている。1目盛当たり平均30ccであるが、1段目だけは底内面にガラスが盛り上がっているため13ccしかなかった。肩部にスリガラス化した3文字が入るが判読できない。また、市章と病院薬局との関係も不明である。

Ⅲ97は彩色の瓦質線香立と考えられる。口径8.8cm、器高7.7cmを測る。胎土は淡灰色で露胎表面には一部炭素が吸着する。胴部は上に向けて膨らみ、頸部が浅くすぼみ、端部が緩やかに外反する。胴部内面に轆轤形成の痕跡と頸部接合の痕が残る。高台は高台脇のない碁笥底で、底部を台形状の削りによって成形する。胴部外面と頸部・口縁部の内外面に丁寧な横方向の磨きを施す。磨きが施された部分に光沢を有する黒色塗料を刷毛で塗り、その上から胴部外面上半部と頸部・口縁部の内外面に明るい緑色塗料を吹き付けている。胴部内面と畳付・高台内面は露胎のままである。口縁外面から胴部中央にかけて鋭い刃物による刻み目の圏線を約0.2cm間隔で横方向に施している。高台内端に長方形の篆刻の押印が押されているが、最初の「長」以外は浅いため判読不可能である。デンボなどを轆轤で製作していた伏見人形窯元の押印に類似したものがある〔奥村1976〕。瓦質で内面露胎であることから、灰を入れた線香立と判断した。

Ⅲ98は大理石製乳棒である。握り手部分だけが残存する。灰色がかかった大理石で、表面は磨かれている。端部に向かって細くなり、先端を平坦にして縁を丸く加工している。硬質で化学変化が少ないため薬の攪拌・調合に使用されたと思われる。

Ⅲ99は蠟石製石筆で、直径0.6cmの丸い棒状の筆記具である。石筆と次ぎに記す石盤は筆記具セットで、明治8・9年頃から大正時代までおもに小学校で使用された〔丸川2008〕とされている。今回の調査でも数点出土しており、それらが京都帝国大学附属病院時代に使用されていたものかは不明である。くすんだ象牙色を呈し、やや丸味を帯びた三角錐の先端は石盤に書いた痕跡を示す。

Ⅲ100はS K60から出土した千枚岩製石盤である。黒灰色を呈し、横方向に剥離しやす

い頁岩～粘板岩系の千枚岩と呼称される薄板を加工した製品である。厚さ1.6cmを測り、石盤隅部が残存する。径0.8mmの貫通する穿孔がある。全面平坦に仕上げられているが、光沢はなくスリガラスの触感がある。側面は上下面よりスベスベしている。

## 5 小 結

### (1) 中世における調査地周辺の土地利用

今回の調査の大きな成果は、中世の当地域における土地利用の一端を明らかにできたことである。1985年のA J 18区調査では、当調査地の東隣接地にあたる調査区西端部で13世紀前葉と15世紀の円形石組み井戸を検出しており、遺構密度は薄い为中世における生活痕跡を確認していた。今回、円形素掘り井戸と想定できる土坑群をあらたに確認し、13世紀に遡る土器類が多量に出土した。また、やや時期は下がるが、S D 123や池状土坑S K 60を検出したことによって、当地が中世に宅地利用されていた可能性を指摘できるようになった。

ここで注目できることは、S D 123が真北に対して大きく振れている点である。何らかの境界溝と想定できるS D 100も真北に対して45°の振れをもっており、円形土坑群の掘り直しの方向も南東から北西に並んでいる。これらの振れが一連のものであるならば、一つの仮説として当地の宅地利用が真北を指向せず、大きく振れた土地区画であった可能性もある。これらの振れは、下層流路の流れの方向に規制されたと想定でき、白河道の振れとも対応する。

平安時代末から鎌倉時代に造営された吉田地域の貴族邸宅や寺院は、基本的には真北を指向したと考えられるが、平成8年度の吉田泉殿町の調査で東に振れた邸宅遺構を確認しており〔内田1998〕、平成20年度には逆に西に振れた掘り込み地業をともなう建物が発見されるなど〔伊藤・笹川2012〕、当地域以北では白河街区とは異なり地勢に合わせた宅地造成がおこなわれていた。遺構の遺存状態が悪いため断定はできないが、今後は周辺地域の調査で真北から大きく振れた遺構を抽出し、白河街区とは異なる地割の存在を再検討していく必要がある。

さらに、当調査地の西端部では南北方向の川が中世以前に流れていたことが判明した。『山城国吉田村古図』に記載された小字名をみると、当調査地の南西に「下河原」、北西に「中河原」、さらにその北に「上河原」の小字名が残る〔吉江2006〕。また、下河原の西側に「西河原」の小字名がみえるが、この「河原」は鴨川ではなく今回検出したS R 215

に由来する可能性が高い。その後、近世にはいつてS R 215は埋没し耕地化されていくが、川の由来は小字名として残り、S R 215の東岸の大きな段差は小字境になったようである。その後、京大病院の建設にともなって耕作面の段差は整地土によって平坦に造成され、景観は大きく変えられたが、現在でも「聖護院川原町」として地名が踏襲され遺跡名にも付されているのである。

## (2) 「京都陶器株式會社」製陶器について

遺構にともなわないが、京都帝国大学附属病院で使用された近代の食器や医療器具が多量に出土しており、それらの陶器に「京都陶器株式會社」と記されたロートあるいは「陶器會社」と記された磁器椀が認められる。

「京都陶器株式會社」は戦後京都東山今熊野に昭和27年、おもに輸出陶器を手がける会社として創業されており〔藤岡1962〕、京都帝国大学時代より新しい混入品の可能性も否定できないが、明治20年に「京都陶器會社」が京都で2番目に古い株式会社として創業されており、「京都陶器會社」に関連する遺物群の可能性が高い。この株式会社は、明治36年4月4日をもって正式に「任意解散」した（『日出新聞』明治36年3月25日付記事）とされている。ところが、「三十二年解散に至った」〔藤岡1962〕とする通説がある一方で、「28年には輸出のメドが立たず解散した」〔三井1979〕という説まであり、混乱している。

「京都陶器株式會社」との関連については、明治28年京都市編纂の『京華要誌 上巻』に「京都陶器株式會社」と記載されており、また、株主であった渋沢栄一の伝記〔竜門社1956〕や重役を務めた田中源太郎の伝記〔三浦1934〕などにも「京都陶器株式會社」となっている。丹羽圭介翁の「明治二十五年遂に会社の解散・・・その後暫く五車楼店主の藤井孫六氏が社長として経営してみたが、これも長くは続かなかった」とする談話〔三浦1934〕や「明治40年代となって清風工業が此の業を継ぐ迄は京都陶器會社は封建的生産の小規模な経営に押し返されていた」〔奈良本1942〕とする説があり、また「二十六年七月商法実施に際しては、あらたに登記され、内地向生産に転換をはかる」〔藤岡1962〕とされているので、この時「京都陶器株式會社」に改めたのかもしれない。

「京都陶器株式會社」銘をもつロートは、京都帝国大学附属病院が明治32年創建であることから「京都陶器株式會社」が倒産する明治36年頃までの「内地向生産に転換」後の製品と想定することができ、ほかの陶製医療器具も同じ会社から納品されたものを多く含んでいる可能性がある。「京都陶器會社」は、京都で西洋の最高級品とされたりモージュの技術を取り入れ、工場制機械工場の先駆けとなった記念すべき会社であり、それらの製品が

京都帝国大学附属病院に採用されたことは十分領けることである。「京都陶器会社」の正確な倒産時期や、その後の京都における窯業生産の系列についての検討は、近代窯業史における今後の重要な研究課題となろう。

なお、磁器碗に記された「陶器会社」に関しては、京都帝国大学創設以来、備品の購入は京都工芸界の発展を配慮し、出来るだけ地元で調達した〔京都大学広報委員会1977〕とされているので、これまで検討してきた「京都陶器会社」を第一に挙げることができるが、ほかに昭和9年作成の京都陶磁器工業組合組合員名簿〔藤岡1962〕に記載された「高山耕山化学陶器株式会社」「松風陶器合資会社」「京都陶器合資会社」なども候補として想定できることを付記しておく。

〔注〕

- (1) 「清水」の落款は生産地の肥前を含め全国で広範に出土しているが、「印・印銘・押印」などと報告され、現時点での集成〔大橋1990, 角谷1992, 鈴木1999〕を見比べると、いずれも微妙に異なっている。また、押印ならば付着するはずの印の外郭・圏線や印の凹部痕跡がなく、いずれも高台裏は文字の陰刻部を除いて平坦である。このことから同一人物もしくは数人が「清水」とヘラ書きした後、飛び出たササクレを取るためにもう一度鉋などで薄い削りを施したのではなかろうか。また、高台裏に残る円圏は鉋削りの痕跡ではなかろうか。
- (2) 典型的な桜花章刻印煉瓦は集治監内で製造された「囚人煉瓦」〔水野1993・1999〕とされており、この煉瓦も監獄内での検印の可能性がある。比較的、近畿地方京阪間の鉄道などでよく見かける煉瓦である。